

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 4 年 9 月 6 日現在

機関番号：35102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2017～2021

課題番号：17K12121

研究課題名(和文) 看護学実習環境を標準化するための基準作成と検証

研究課題名(英文) Creating and verifying standards for standardizing the nursing practice environment

研究代表者

古都 昌子 (Furuichi, Masako)

鳥取看護大学・看護学部・教授

研究者番号：00602583

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究において看護学実習における学生の居場所・実習物品について，“学生の居場所がある”，“実習物品の必要数を配置・整備する”，“学生用の電子カルテがある”からなる「看護学実習における物理的環境モデル」を作成した。学生の居場所は，ナースステーションに近く，学生が安心して情報収集や思考作業をする場所をもち，かつ，ナースステーション内の小スペースをもつとした。実習物品は実習専用バッグにアネロイド血圧計，酸素飽和度測定器を2台ずつ配置した。居場所についてはおおむね守られ，実習物品の使いやすさが示された。今後，看護学実習の物理的環境モデルに対する認知を高め，教育・臨床の連携を深め調整する必要がある。

研究成果の学術的意義や社会的意義

看護基礎教育の質的向上を目指し，2022年度よりカリキュラム第5次改正が発出され，地域生活者・患者への弾力的な看護実践能力の育成が求められている。看護学実習の教育環境の充実，看護学生の看護実践能力および看護職としての発達に影響するといえる。しかし，看護学実習の人的環境について視点を当てた研究はあったが，学生の居場所や実習物品に着眼した研究はみられなかった。学生の居場所や実習物品の調整に取り組むことは，次世代の看護を担う学生を大切に教育する志向の一環となる。本研究において「物理的環境モデル」を示したことは，教育施設と実習施設が連携して看護学実習の教育の質的向上を図る契機につながる。

研究成果の概要(英文)：In this study, regarding the students whereabouts and training items in nursing practice, nursing practice consists of “there is a students whereabouts”, “arrangement and maintenance of the required number of training items”, and “there is an electronic medical record for students”. Physical environment model in practice was almost created. The students whereabouts are close to the nurse station, have a place where students can gather information and think with peace of mind, and have a small space inside the nurse station. As for the training items, Two aneroid sphygmomanometers and two oxygen saturation measuring instruments were placed in the training bag. The whereabouts were generally protected, and the ease of use of the training items was shown. It is necessary to raise awareness of the environmental model and deepen and coordinate educational and clinical collaboration.

研究分野：看護学 看護学実習

キーワード：看護学実習 看護学生 実習環境 居場所 実習物品

## 1. 研究開始当初の背景

看護学実習は、看護基礎教育において重要な科目であり、看護師になる過程での教育的な意義は大きい。しかし、学生の居場所や実習物品については、看護師養成所のガイドラインにおいて詳細の規定はされておらず、実習施設の努力義務に任されている課題があった。学生にとっての実習環境をとらえ直し、整備していくための基準作成の必要性があると考えた。研究者らは、平成 26 年度から過去の研究活動において、看護学実習における物理的環境としての学生の居場所や実習物品の現状と課題について取り組んできた。中国四国地方の看護師養成所の現状と課題（古都、小田嶋、2015）、北海道地方の全数調査（古都、小田嶋、2016）により、十分整備されていない現状と教育施設と実習施設の連携に基づく調整の必要性、指標の策定の必要性が確認できた。その成果を基礎資料とし、研究に着手した。

### 【本研究における用語の定義】

物理的環境：実習環境において学生の居場所、空間、物品とする。

## 2. 研究の目的

- ( 1 ) 看護学実習における学生の居場所・実習物品の「モデルタイプ」を作成する。
- ( 2 ) 作成した学生の居場所・実習物品の「モデルタイプ」について、効果を検証する。

## 3. 研究の方法

### ( 1 ) 第 1 段階 ( 2017 ~ 2018 ) : 「モデルタイプ第 1 案」の作成

上記研究成果および看護学教育学会交流集会（古都昌子、鈴木佳代：基礎看護学実習における物理的環境の現状と課題 - 指標設定に向けた検討 - 日本看護学教育学会第 27 回学術集会交流集会、2017）を企画運営し、看護学実習の物理的環境に関する専門家からの意見を得た。さらに研究者が 2017 年から毎年企画運営している看護学実習における学生からの視座をふまえた看護学教育学会交流セッションにおける、看護学教員や実習指導者など参加者からのコメントを参考に物理的環境の指標を抽出した。その結果から「基礎看護学実習の物理的環境におけるモデルタイプ第 1 案」を提案し、専門家の意見を得た。

### ( 2 ) 第 2 段階 ( 2018 ~ 2020 ) : 「モデルタイプ第 2 案」の作成

「モデルタイプ第 1 案」の現実的な運用における効果と課題を明らかにし、指標設定および実習環境のモデルタイプの完成に具体的な示唆を得ることを目的とし、看護学教員および実習指導者へ実習物品などのモデルタイプを提示し、グループインタビューを実施した。研究協力者は、研究メンバーのネットワークを活用して、北海道あるいは関東近郊で、ネットワークサンプリングにおいて参加者を募った。研究協力者に基礎看護学実習の指標および指標をふまえた実習環境としてのモデルタイプ第 1 案を提示し、現実可能性をふまえた効果や運用上の課題などについて意見をすることとし、基礎看護学実習指導にかかわる教員や実習指導者へグループインタビューを行った。結果の一部を東京女子医科大学看護学会第 13 回学術集會にて公表した（古都昌子、鈴木佳代：基礎看護学実習における物理的環境の現状と課題 - 指標設定に向けた検討 - , 2017）。

### ( 3 ) 第 3 段階 ( 2020 ~ 2021 ) : モデルタイプの実践的検証

前述したように、本研究の前提となる取り組みとして中国四国地方、北海道地方、関東地方の基礎看護学実習の物理的環境の現状について、悉皆調査の結果から、多様な調整を要する物理的環境の現状を確認した（古都、小田嶋、2016）（小田嶋、古都、2016）（古都、鈴木佳、2017）。「基礎看護学実習の物理的環境におけるモデルタイプ」を作成し、その後、看護系大学の教員、看護師養成所の教員および実習指導者のグループインタビューによってモデルタイプへの意見を募り、モデルタイプの修正版を再考した。

第 3 段階では、考案したモデルタイプ案を用いて、新型コロナウイルス禍の感染管理対策としての対応もあわせて、専用実習バッグを規格化し、A 大学の基礎看護学実習において、実習病棟ごとに定数配置した。その後、A 大学看護学部基礎看護学実習においてモデルタイプの一部である「専用実習バッグ」を設置した実習病棟の実習指導者および担当教員、実習を履修した学生 87 名のなかで質問紙調査への研究協力に同意の得られた者を対象として質問紙調査を行った。

その結果から、基礎看護学実習の物理的環境の指標設定に向けた具体的な検討を行い、モデルタイプ最終版への作成を目的とした。新型コロナウイルスの影響により、質問紙調査は予定よりも時期が遅れたが、2020 年 10 月 ~ 2021 年 3 月に質問紙調査を実施した。

## 4. 研究成果

### ( 1 ) 第 1 段階 ( 2017 ~ 2018 ) : 「モデルタイプ第 1 案」の作成

第 1 段階では、関東地方の看護基礎教育全教育施設（大学 71 校、3 年課程看護師養成所 128

校計 199 校) に質問紙を郵送した。回収数は、大学 25 校 (35.2%)、看護師養成所 (以後、看護学校とする) 59 校 (46.1%) の計 84 校であり、回収率は 42.2% であった。そのうち、欠落回答のあった 2 部を除外し、大学 25 校、看護学校 57 校の 82 校を分析対象とした。

実習施設の病床数は、50 床から 1000 床と多岐にわたり、学校と実習施設との距離は、大学は 30 分～1 時間以内 38%、看護学校は同一敷地内 42% が最も高かった。実習施設の設備について大学は非常に整っている 20%、整っている 60%、看護学校は非常に整っている 2.4%、整っている 60%、あまり整っていないが 36% であった。実習施設全体の設備について学生更衣室、休憩室は大学、専門学校とも専用あり 50% を上回った一方、学習室はいずれも専用あり 30% 程度、詰所内の学習コーナーはいずれも専用あり 3% 前後であった。実習物品について血圧計の持ち込みありはいずれも 55% 前後で、聴診器の持ち込みありはいずれも 70% 前後であった。実習施設の設備、実習物品の現状と課題の自由記述から 6 つの《カテゴリー》と 20 の [サブカテゴリー] が抽出された。コードは 219 であった。物理的環境の指標として実習施設の設備、実習物品の現状と課題の自由記述から、物理的環境の指標として《学生のスペースが確保されている》《実習物品の必要数を配置・整備する》《学生用の電子カルテがある》を見出した。また、物理的環境の指標を目指す過程では《限界をふまえて調整する》必要があり [施設や病棟ごとの多様な現状がある] [構造上仕方ない] [他職種、他校と兼用で使用する] の限界をふまえて《実習施設と教育施設の関係をもとに調整する》《教育的な根拠や配慮のもとに対応する》が得られた。

基礎看護学実習における物理的環境の現状は、大学と看護学校では、一部差異がみられたが、学生専用のスペース、実習の展開に適した物品の不足などの共通した課題と限界も明らかとなった。病棟に持ち込んでいる物品は多いと想定され、感染源を運ぶメッセンジャーとなる可能性 (後藤ほか, 2015) から、感染管理上の課題も懸念される。物理的環境の指標を可視化するとともに、根拠をふまえて教育的配慮により創意工夫する重要性が示唆された。

上記研究成果および看護学教育学会交流集会 (古都昌子, 鈴木佳代: 基礎看護学実習における物理的環境の現状と課題-指標設定に向けた検討-日本看護学教育学会第 27 回学術集会交流集会, 2017) を企画運営し、看護学実習の物理的環境に関する専門家からの意見を得た。さらに研究者が 2017 年から毎年企画運営している看護学実習における学生からの視座をふまえた学会交流セッションにおける、看護学教員や実習指導者など参加者からのコメントを参考に物理的環境の指標を抽出し、「基礎看護学実習の物理的環境におけるモデルタイプ第 1 案」を勘案した。

【基礎看護学実習の物理的環境のモデルタイプ 第 1 案として以下のとおりとした】

**指標 1: 学生の居場所が確保されている**

学生の居場所 (カンファレンスルーム、詰所内学習コーナー) は十分とは言えない (兼用スペースがほとんどである)。

詰所内に小コーナーを設置する。学生用学習コーナーを可視化するデザインによりスペースを明示する

**指標 2: 実習物品の必要数を配置・整備する**

学生の実習物品において、血圧計、パルスオキシメーターなどの頻回に使用する物品の設置が十分とは言えない (持ち込み割合も高い)。\* 学生数 5-6 人の基礎看護学実習を想定してセット化する

感染管理上の視点からも最低数を設置し、物品持込みはしない

学生の実習物品セットの定数化、実習物品セットを規格化する

(2) 第 2 段階 (2018~2020): 「モデルタイプ第 2 案」の作成

第 2 段階では、インタビューの結果、モデルタイプについての意見として、逐語録から 61 の文脈単位を抽出し、15 の重要アイテムから 7 カテゴリーに集約した。看護学教員は、基礎看護学実習の物理的環境の指標設定について、学生の居場所についての認識として《臨床の状況に応じて兼用できる優先スペースをもてるように調整を要する》《ナースステーションの中での学生スペースには限界はあるが臨場感が学べる》《学生が安心して意見交換できるスペースは必要である》の 3 カテゴリー、実習物品や電子カルテについての認識として、《実習物品はコンパクトで感染管理をふまえたセットにする》《実習物品は、実習指導者と教員が連携して学生とともに管理する》《実習物品をすべて持ち込んだり、病棟の物品を共有したり、環境に応じて一様にはならない》《優先して使用でき、受持患者のみ閲覧可能なパソコンがある》の 4 カテゴリーが得られた。

看護学教員は、基礎看護学実習における物理的環境としての学生の居場所や実習物品への多様な考えを有していた。実習施設の状況も様々な中で、学生の居場所はときには安心して意見交換ができ、ときには臨床ならではの臨場感を感じながら、居合わせることが大切である。今後、実習物品の感染管理も厳重に対応する必要性は増していくと考える。コンパクトで感染管理対策を十分行える実習セットとして一元化し、臨床との連携の中で学生に意味を伝えながら管理していく必要がある。基礎看護学実習の物理的環境の指標設定における弾力的な示唆を得た。

### (3) 第3段階(2020~2021):モデルタイプの実践的検証

前述したように、本研究の前提となる取り組みとして中国四国地方、北海道地方、関東地方の基礎看護学実習の物理的環境の現状について、悉皆調査の結果から、多様な調整を要する物理的環境の現状を確認した(古都,小田嶋,2016)(小田嶋,古都,2016)(古都,鈴木佳,2017)。「基礎看護学実習の物理的環境におけるモデルタイプ」を作成し、その後、看護系大学の教員、看護師養成所の教員および実習指導者のグループインタビューによってモデルタイプへの意見を募り、修正版を再考した。モデルタイプとは、以下のとおりである。

#### 【基礎看護学実習の物理的環境のモデルタイプ 2020 暫定案】

学生の居場所が確保されている。

[ 詰め所内の小コーナーあるいは隣接した小部屋などが確保されている ]

実習物品の必要数を配置・整備する(実習物品の持ち込みをしない)。

[ 病棟に血圧計(アナロイド2台),パルスオキシメーター2台などを定数化(最低数で可)した専用の実習バッグを設置し,教育施設から持ち込まない ]

実習バッグの規格は,オフィスカリングバッグビジカル(ポリエステル製,消毒可能),アナロイド血圧計2台,パルスオキシメーター2台,ダブルステート1台を基準とする。

学生用の電子カルテがある

[ 実習グループ5-6名に2台程度は,いつでも使用可能な電子カルテがある ]

第3段階では、新型コロナ禍の影響により、上記モデルタイプに関する質問紙調査は予定よりも時期が遅れた。実習指導者の結果からは、学生の居場所は「確保されている」は43.4%、「やや確保されている」は39.6%であり、居場所はナースステーション近くの部屋、ナースステーション内のテーブルの順で割合が高かった。各病棟に配置した専用実習バッグ(アナロイド血圧計,酸素飽和度測定器)について「知っている」が52.8%、「知らない」が39.6%であった。実習バッグが使いやすいと感じる人の理由を自由回答で求めたところ、学生が使い慣れている物品であること、スタッフへの遠慮なく使えるなどの記載が得られた。学生の結果からは、実習物品のデザイン性への一部要望はみられたが、使いやすさについて効果が確認できた。結果について日本看護学教育学会第32回学術集会にて発表した(古都昌子,小田嶋裕輝:基礎看護学実習における物理的環境モデルの効果と課題 看護学実習の物理的環境指標の構築に向けて - ,2022.8)。

本研究は、看護学実習における物理的環境(学生の居場所と実習物品)に着眼し、標準化することを目的としていた。学生の実習物品については、定数化・規格化し、運用を始めて具体的な意見が得られている。しかし、学生の居場所については、実習病院ごとの物理的環境の状況も多様であり、標準化に向けた提案にとどまっている。また、2019年度に研究責任者が所属施設を変わり、附属病院をもたない単科の看護大学へ異動したことや、2020年初頭からの新型コロナウイルスの蔓延によりモデルタイプの具体的な検討が困難となった影響も否めない。しかし、研究成果から、「学生が育つ」環境として、以下のミニマムな設定の必要性が確認できた。看護学実習における学生の居場所・実習物品について、「学生の居場所がある」、「実習物品の必要数を配置・整備する」、「学生用の電子カルテがある」からなる「看護学実習における物理的環境モデル」を作成した。学生の居場所は「ナースステーションに近く、学生が安心して情報収集や思考作業をする場所をもち、かつ、ナースステーション内の小スペースをもつ」とした。実習物品は「実習専用バッグにアナロイド血圧計、酸素飽和度測定器を2台ずつ配置する」とした。居場所についてはおおむね守られ、実習物品の使いやすさが示された。新型コロナ禍の現状もふまえて、感染管理の視点を重視した専用バッグの必要性は高まっている。今後、看護学実習の物理的環境モデルに対する認知を高め、教育・臨床の連携を深め調整する必要がある。

また、本研究をつうじて、物理的環境を調整する実習環境における人的環境の必要性や教育担当者および学生もまじえて環境調整していく必要性を再認識した。今後の継続的な教育・研究活動につなげ、看護学実習の質的向上に努めていきたい。

本研究の過程をつうじて、ご協力・ご支援いただいた皆さまに心より感謝の意を伝えたい。

## 引用・参考文献

- 古都昌子(2007): 看護学生の自己効力感を高める人的実習環境の分析, 平成 17 年度鳥取大学大学院医学系研究科保健学専攻看護学分野修士論文.
- 古都昌子(2012): 看護基礎教育の臨床実習に関する過去 5 年間の研究タイプの概観, 東京女子医科大学看護学会誌 7(1):33-38.
- 古都昌子, 小村三千代ほか(2015): 実習施設と教育施設との連携に向けての具体的方策—看護学部開設 3 年目に導入した看護学実習連携会議の効果—, 札幌市立大学研究論文集 9(1), 25-30.
- 古都昌子, 小田嶋裕輝(2016): 臨床実習における物理的環境と教員の認識—実習物品および学生の居場所に焦点を当てて—, 札幌市立大学研究論文集 10(1), 77-83.
- 古都昌子, 鈴木佳代(2017): 基礎看護学実習における物理的環境の現状と課題—指標設定に向けた検討—, 東京女子医科大学看護学会学術集会抄録集, 26.
- 古都昌子, 小田嶋裕輝(2022): 基礎看護学実習における物理的環境モデルの効果と課題—看護学実習の物理的環境指標の構築に向けて—, 日本看護学教育学会第 32 回学術集会.
- 後藤淳, 小山幸子(2015): 臨地実習で使用したマンシエットに対する効果的な消毒方法の検討, 日本看護技術学会第 14 回講演抄録集, 121.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 4件／うち国際共著 0件／うちオープンアクセス 4件）

|  |                     |
|--|---------------------|
| 1. 著者名<br>古都昌子                           | 4. 巻<br>30(2)       |
| 2. 論文標題<br>看護学の学士課程修了時の学生が語る「看護職としての『私』」 | 5. 発行年<br>2020年     |
| 3. 雑誌名<br>日本看護学教育学会誌                     | 6. 最初と最後の頁<br>23-35 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし            | 査読の有無<br>有          |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスとしている（また、その予定である）    | 国際共著<br>-           |

|  |                         |
|--|-------------------------|
| 1. 著者名<br>古都昌子, 鈴木佳代                             | 4. 巻<br>60(4)           |
| 2. 論文標題<br>実習でともに育つ学生と教員 学生の存在をともに学び育つ仲間としてとらえ直す | 5. 発行年<br>2019年         |
| 3. 雑誌名<br>看護教育                                   | 6. 最初と最後の頁<br>0264-0267 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし                    | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難           | 国際共著<br>-               |

|   |                         |
|---|-------------------------|
| 1. 著者名<br>古都昌子                          | 4. 巻<br>60(4)           |
| 2. 論文標題<br>実習でともに育つ学生と教員 状況についての感覚的などらえ | 5. 発行年<br>2019年         |
| 3. 雑誌名<br>看護教育                          | 6. 最初と最後の頁<br>0268-0275 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし           | 査読の有無<br>無              |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難  | 国際共著<br>-               |

〔学会発表〕 計16件（うち招待講演 0件／うち国際学会 0件）

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>古都昌子, 鈴木佳代ほか                             |
| 2. 発表標題<br>ともに育つ看護職へ向けて、私たちにできること - 教育・臨床の視座を結集して - |
| 3. 学会等名<br>日本看護学教育学会第31回学術集会交流セッション                 |
| 4. 発表年<br>2021年                                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>鈴木佳代, 古都昌子ほか                             |
| 2. 発表標題<br>改めて『臨地実習のリアリティ』を探る! - 臨地実習だからこそ経験できること - |
| 3. 学会等名<br>日本看護学教育学会第31回学術集会交流セッション                 |
| 4. 発表年<br>2021年                                     |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>古都昌子, 鈴木佳代, 新井麻紀子, 佐久間和幸, 大谷則子, 鈴木真由美, 菊池麻由美, 手島芳江, 上田理恵, 佐藤紀子 |
| 2. 発表標題<br>看護学実習における指導者 - 学生 - 教員の対話, リアリティの違いをふまえて看護をともに考えよう             |
| 3. 学会等名<br>日本看護学教育学会第30回学術集会交流セッション                                       |
| 4. 発表年<br>2020年   |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>古都昌子, 田中美菜江, 岡本朋子, 藤原美智子, 福永まゆみ, 佐々木晶子, 田中響  |
| 2. 発表標題<br>基礎看護技術演習における学生の学習意欲の現状と影響要因 - 看護学部2年生の認識から - |
| 3. 学会等名<br>日本看護学教育学会第30回学術集会                            |
| 4. 発表年<br>2020年   |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>古都昌子, 鈴木佳代                                    |
| 2. 発表標題<br>基礎看護学実習の物理的環境に関する指標設定に向けての検討 モデルタイプへの看護学教員の認識 |
| 3. 学会等名<br>東京女子医科大学看護学会 第16回学術集会                         |
| 4. 発表年<br>2020年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>古都昌子, 鈴木佳代, 新井麻紀子, 大谷則子, 佐久間和幸, 鈴木真由美, 在間絹苗, 高柴律子, 菊池麻由美  |
| 2. 発表標題<br>看護学実習における学生のリアリティに寄り添い, とともに育つ - 学生・実習指導者・教員のそれぞれの見え方から - |
| 3. 学会等名<br>日本看護学教育学会第28回学術集会交流セッション                                  |
| 4. 発表年<br>2018年  |

|  |
|--|
| 1. 発表者名<br>古都昌子, 鈴木佳代                            |
| 2. 発表標題<br>看護学実習における学生の学びを支援する-学生の居場所や実習物品に着眼して- |
| 3. 学会等名<br>日本看護学教育学会第27回学術集会交流セッション              |
| 4. 発表年<br>2017年                                  |

|   |
|---|
| 1. 発表者名<br>古都昌子, 鈴木佳代                         |
| 2. 発表標題<br>基礎看護学実習における物理的環境の現状と課題-指標設定に向けた検討- |
| 3. 学会等名<br>東京女子医科大学看護学会第13回学術集会               |
| 4. 発表年<br>2017年                               |

〔図書〕 計2件

|   |                 |
|---|-----------------|
| 1. 著者名<br>佐藤紀子ほか, 古都昌子(分担執筆) 321-329    | 4. 発行年<br>2019年 |
| 2. 出版社<br>医学書院                          | 5. 総ページ数<br>364 |
| 3. 書名<br>つまずき立ち上がる看護職たち 臨床の知を甦く看護職生涯発達学 |                 |

〔産業財産権〕

〔その他〕

-



6. 研究組織

|           | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)                      | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号)                        | 備考 |
|-----------|--|--|----|
| 研究<br>分担者 | 小田嶋 裕輝<br><br>(Odajima Yuki)<br><br>(20707567) | 名古屋市立大学・大学院看護学研究科・准教授<br><br><br><br>(23903) |    |

|           | 氏名<br>(ローマ字氏名)<br>(研究者番号)  | 所属研究機関・部局・職<br>(機関番号) | 備考 |
|-----------|----------------------------|-----------------------|----|
| 研究<br>協力者 | 鈴木 佳代<br><br>(Suzuki Kayo) |                       |    |

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
|---------|---------|
|         |         |